

地域創造・循環型教育システムを生かす学校づくり

～ 地域・学校の特色を生かした教職員の資質向上の取組 ～

西臼杵支会 五ヶ瀬町立上組小学校 黒木 麻矢

1 主題設定の理由

五ヶ瀬町は人口約3000人、九州山地のほぼ中央に位置している。阿蘇カルデラの外輪山を仰ぎ、九州で最も気温が低い地域であるため、日本最南端の「五ヶ瀬ハイランドスキー場」を有する自然豊かな町である。また、多くの世帯が三世代・四世代家族であることや夜神楽等の伝統文化を現在まで継承していること等も特筆できる。

山間地において少子化、高齢化、過疎化が進む現状を、この10年間、五ヶ瀬町の教育は学校教育を中心とした「五ヶ瀬教育ビジョン」のもと、G授業をはじめとする先進的な取組で全国の注目を集めてきた。

しかし、Society5.0に向け、社会の変化は急激にスピードを増してきており、町のこれからを考えると学校教育にとどまらない、町全体が結びつきをさらに強めた取組を行っていく必要がある。

そこで、幼児からお年寄りまでが、生涯にわたって互いに関わり合いながら学び続けることのできる地域創造・循環型教育システム「五ヶ瀬教育グランドビジョン」を礎に、教職員の専門性を高め、学校運営協議会や地域学校協働本部とどのように連携・協働していくかがこれからの五ヶ瀬町の教育の核になると考え、研究主題を「地域創造・循環型教育システムを生かした学校づくり～地域・学校の特色を生かした教職員の資質向上の取組～」と設定した。

2 研究のねらい

- (1) 町内の既存の素材・資源（ひと・もの・こと等）を教育教材としたG授業を活用し、教職員一人一人の専門性を高める取組推進について明らかにする。
- (2) 小規模校の特性を活かした学校づくりを学校運営協議会や地域学校協働本部との連携・協働でどのように行うべきかを明らかにする。

3 研究の概要

- (1) 町内小学校による集合学習（G授業）を活かした教職員の専門性向上

「五ヶ瀬を知り、五ヶ瀬で学び、五ヶ瀬に貢献する教育活動の充実」を視点に、町内既存の素材・資源（ひと・もの・こと等）を教育教材とした合同授業（G授業）を年間通じて意図的・計画的に展開した。

効果的な授業を行うためには、様々な角度からの教材分析や教材研究が必須である。そこで月に1・2回程度、町内の同学年担当教諭が集まり、授業研究を行った。G授業実施後は、成果と課題を明確にし、今後の授業プランに反映させた。議論が白熱し、授業の方向性が決まらない場合は、教頭がファシリテーターとして意見を整理・精査し、指導・助言を行った。

- (2) 小規模校の特性を活かした「学校運営協議会」「地域学校協働本部」との連携・協働による学校づくり

① 組織

五ヶ瀬の豊かな教育素材・資源（ひと・もの・こと等）を活かした教育活動を展開するため、保護者・地域住民・学校運営協議会委員・地域学校協働活動推進員・校長・教頭で構成した。

4月には、町全体で学校運営協議会研修会が開催される。ここでは、「次世代を担う人材育成・持続可能な五ヶ瀬町の実現」のため、学校・家庭・地域が一体となった教育の推進を図っていくことを確認した。

② 具体的な取組（上組小学校の運動会）

今年度の運動会は、新型コロナウイルス感染症の2類から5類への引き下げ後初めてであったため、今年度の運動会を「今後の基盤となる」ことを念頭に意見交換等を行った。企画・運営を密に行い「地域とともにある学校づくり」「学校を核とした地域づくり」が目的・目標として明確化された。また、運動会を実現

させる方法・手段について体育主任を中心に全職員共通理解のもと保護者と地域との具体的な話し合いを通して、互いの意思疎通がなされた。その結果、これまでの「子どもたちが活躍する場」であった運動会に「地域住民も参加しやすい運動会」という目的を加えた企画・立案を行った。

児童は、招待状やポスターを作成した。招待状は地域の全世帯へ配付しポスターは各地区の公民館等に掲示した。

学校で検討した案を6月中旬の学校運営協議会で承認し、7月上旬・8月下旬の夜2回、運動会実行委員会を開催した。(参加者：各区公民館長、組長、コミュニティスポーツ推進委員、女性部、地域学校協働活動推進員、PTA三役、PTA保体部、校長、教頭、体育主任)。

会議では、各公民館長を中心に学校職員の助言を受けながら競技種目の精選、役員の役割分担、地区住民への呼びかけ方法等について意見をまとめていった。

地域学校協働活動推進員の方には当日、放送で競技参加の呼びかけや実況中継を行っていただいた。



【運動会実行委員会】

4 研究の成果と課題 (○:成果 ●:課題)

(1) 教職員の専門性向上

○ 複数の教員で授業研究することで、多面的・多角的な教材分析をすることにつながり、個々の授業力や教材分析力を高める機会となった。また、よりよい授業づくりを目指そうとする教員の意識改革や分かる授業を展開するための指導力の向上へとつながった。

さらに、教頭が全体を俯瞰で捉えて

指導・助言する技術を磨く場面を経験し、教頭自身の専門性や資質向上を図ることにもつながった。

○ 地域や保護者と関わる機会が多く、その思いや願いに気づき、よりよい連携の在り方について学ぶことができた。

● G授業では、地域人材の高齢化に伴い新たな人材が必要となってきた。また、定期異動により職員が順次入れ替わるため、地域人材や教育資源、地域の願いや思いなどを確実に引き継いでいく必要がある。

(2) 小規模校の特性を活かした学校づくり

○ 運動会当日の地域参加者が160名を超える大盛況の運動会となった。学校・家庭・地域それぞれの思いを大切にしながら、学校行事として運動会をいかに運営するか、職員・地域の方と熟考し、最善案を導き出すことの重要性に気づくことができた。また、日頃から地域の方々とコミュニケーションをとっておくことが連携・協働には大事であることを改めて確認できた。

● 管理職を含め、教師自身がどのような人材・教育資源があるのか等、まずは地域を知ることが大切である。その上で、地域学校協働本部や学校運営協議会の方々と進んで情報交換し、ネットワークを広げることが必要である。



【地域住民も参加した運動会】